4 M.K. ガーンディーの「語り」

井坂 理穂（東京大学大学院総合文化研究科・教養学部 教授）

こんにちは。後藤先生と同じく総合文化研究科に所属しております井坂です。今回、この企画で「語る人」としてガーンディーを考えるという機会をいただき、たいへんありがたく思っております。

ガーンディー、すなわちモーハンダース・カラムチャンド・ガーンディー（Mohandas Karamchand Gandhi, 1869-1948）については、みなさまもよくご存じのことと思います。「偉大なる魂」を意味する「マハートマー」という尊称でも呼ばれ、イギリス支配下のインドを独立に導いた「インド独立の父」として知られている人物です。また、非暴力・不服従運動の提唱者としても有名です。私自身がインド近代史、とりわけガーンディーの出身地であるグジャラート地方の近代史を扱っている関係で、ガーンディー自身の書いたものや彼について書かれた研究書や論文とは、それなりに長い期間にわたっておつきあいしてきました。が、実はいつになってもガーンディーについて書いたり話したりするときにはためらいを感じます。あとでお話ししますが、ガーンディーの言葉は膨大な量が記録され、残されていて、読んでも読んでもまだ足りない、という感じです。また、ガーンディーについての研究も、世界各地からあまりにたくさん出されていて、今も出版されつづけています。私自身、まだまだ読まなければならないものは多いのですが、今回はとりあえず「語る」というキーワードをもとに話題を提供する、という観点から、ガーンディーの「語り方」の特徴を考察してみたいと思います。試行錯誤中の、ざっくりとした話になってしまうかと思いますが、お許しいただければ幸いです。

ガーンディーの生涯を改めて振り返る時間はないかと思いますが、かいつまんでお話しすると、彼は1869年にインド西部で藩王国の宰相の家に生まれ、英語で高等教育を受けたのちに、18歳のときにイギリスに留学して、そこで弁護士の資格を取得します。いったん帰国したのち、今度は南アフリカにわたり、弁護士業に携わるなかで、やがてインド人差別問題に取り組むことになります。この南アフリカ時代に、彼は「サティヤーグラハ（真理の堅持、の意）」という名称のもとに非暴力抵抗運動を組織しはじめます。1915年、45歳のときに、彼はインドに戻り、その後はインドでイギリスの植民地支配に抵抗し、非暴力・不服従運動を

展開することになります。今日の報告では、彼がインドに戻ってからの時期の「語り」に焦点をあててお話しします。といっても、この時期の語りも一律に論じることは本来はできないのですが、ここではやや単純化したかたちでお話しします。

なお、この報告での「語る」という行為には、スピーチだけではなく、文字を通じての語り、さらには行為を通しての語り、という観点も含まれています。若干混乱を招くところもあるかもしれませんが、ぜひディスカッションで忌憚のないご意見をお寄せいただければ幸いです。

以下ではガーンディーの「語り」の特徴を、（1）「語る」べきことの多さ、（2）行為・身体を通じての「語り」、（3）「語り」と対話、（4）「語り」を伝える人々、という４つの観点からお話しします。

（1）「語る」べきことの多さ

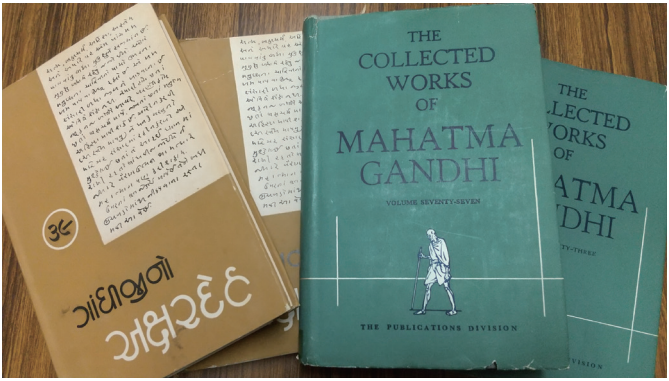

図１　『ガーンディー全集』英語版、グジャラーティー語版

まず強調しておきたいのは、ガーンディーはとにかくありとあらゆるテーマについて語る人であった、ということです。

彼の死後、『ガーンディー全集』が編纂されますが、英語版で100冊、ヒンディー語版で97冊、グジャラーティー語版で82冊ほど出されています。彼は自ら新聞を発行していましたし、膨大な数の書簡も残しています。インドに帰国してからの時期については、スピーチもかなり残っています。それらで使われている言語ですが、ガーンディーは母語であるグジャラーティー語、北インドで広く使われているヒンディー語（彼自身の言葉では「ヒンドゥスターニー語」という言い方になりますが）、それから英語、という３つの言語で読み書きすることができま

した。『全集』はそれらの言語で残されたものを、相互に翻訳しながら編纂されており、今ではすべてインターネット上で見ることができます。もちろん、他にもガーンディーにまつわる史料、彼の語りの記録はたくさんあります。ガーンディーを研究するのはやりがいはありますが、膨大な史料に目を通すだけでもかなりたいへんです。

それでは、これほど多くの「語り」のなかで、ガーンディーは何を語っていたのでしょうか。

彼はありとあらゆることについて、新聞で、書簡で、スピーチで、延々と語っています。そこではイギリス植民地支配体制や独立運動、インド国民会議派などの話ももちろんするわけですが、食べ物の話とか、病気の治療法の話とか、衛生の話とか、そういった日常生活にかかわる話題もびっくりするほど多いのです。というのも、ガーンディーにとって、政治・社会状況と、個々人の内面の状態や日常生活のあり方とは深く連動するものでした。いかに自らを律するか、いかに心身を健康な状態で維持するか、ということは、彼にとってはインドの自治にそのままつながる問題でした。彼のなかでは内と外の世界、私と公の領域とは、分けることのできないものであった、といってもよいかと思います。

彼はこうした考え方のもとに、あらゆる面に関して、何をすべきか、いかにすべきかを模索し、「真理」を探究し、その模索の過程を事細かに語りました。政治、経済、貧困、宗教、神（彼にとっては神を語ることは不可欠でした）、カースト、教育、身体、衣食住、性、衛生など、実に多彩なテーマを取り上げています。また、自らの思考・模索にあわせて様々な実践、実験を行います。彼は南アフリカ時代から、活動を共にする人々との共同生活を営むようになりますので、そこに住む他の人々も彼の実験につきあわされていました。こうした実験のありさまを、ガーンディーは出版物やスピーチ、書簡を通して語りつづけるのです。

たとえば、自分の発行していた新聞に、彼は食をめぐる実験についても長々と書いています。一例を挙げれば、彼はある時期、火を通さない食物（彼はヴェジタリアンですから植物性の食物になります）だけを食べる実験をしたことがありました。彼は新聞を通じてその実験の様子を事細かに語り、実験の結果、下痢をしてしまったという顛末までも記しています。彼の言葉によれば、彼は真理の探究者として、人間が身体、精神、魂を健全な状態に保つための完璧な食を見つける必要がある、というわけです（*Young India*, 22 August 1929）。そして彼はこうした実験のありさまについての情報を、読者と共有しなければならない、と考えていたわけです。

このようにあらゆる領域で「真理」を求めて試行錯誤し、その考えを実践に結

びつける彼の様子は、多くの人々の関心をひき、訴えかける力をもっていたと思われます。こうしたガーンディーを、政治指導者としてばかりでなく、求道者、宗教家、聖人として捉える人々も少なくありませんでした。彼の語りは道徳性、倫理性、宗教性などとしばしば結びつけて捉えられることになります。

(2) 行為・身体を通じての「語り」

次にガーンディーの「語り」を考えるうえで重要なのが、彼が言葉を通じてばかりでなく、行為や身体自体を介して、しばしば強力なメッセージを発信していた、ということです。たとえば、糸紡ぎ、逮捕される、歩く、祈る、掃除をする、断食をする、などの行為や、そうした行為を行っている彼の姿・身体（腰布姿を含め）は、様々な解釈が付与されつつ、それ自体が大きな発信力をもっていた、ということもできるかと思います。そうした「語り」のあり方は、ときには彼の意図した意味あいとは違う解釈を付されてしまうこともありました。しかしそれでも、あるいはそうした解釈の余地を残していたからこそ、ガーンディーの呼びかけはしばしば識字能力や言語の違いを超えて、広範な影響力をもつことになったわけです（ちなみに植民地インドの識字率は1931年センサスの段階でも１割未満でした）。

図２　糸を紡ぐガーンディー
出典：Wikimedia Commons（Mohandas K. Gandhi）

図３　ガーンディーの「塩の行進」（1930年）
出典：Wikimedia Commons（Mohandas K. Gandhi）

ここにあげた写真には、糸車を回すガーンディーと、有名な「塩の行進」のときのガーンディーの姿が写されています。ガーンディーと聞いたときには、彼の残した言葉自体よりも、こうしたヴィジュアルを思い出すという人も少なくないように思います。さきほど後藤先生がお話しになったチャーチルが、ガーンディーを「半裸の托鉢僧の姿をした（イギリスの）ミドル・テンプル法曹院出身

の弁護士」と苦々しげに評したことがありましたが、このような言葉にも、まさにガーンディーの姿そのものが、メッセージを発していた様子がうかがえるわけです（ちなみに、実際にはガーンディーが在籍したのはミドル・テンプルではなくインナー・テンプル法曹院でした）。

(3)「語り」と対話

ガーンディーの語りに関して、次に注目したいのが、彼が対話を非常に重視していた、ということです。ガーンディーは政治・社会運動、日常生活のいずれにおいても、「真理」の探究を掲げて試行錯誤を繰り返しますが、その過程では対話が重要な役割を果たしていました。

その様子は、彼が1909年に記した『ヒンドゥ・スワラージ（インドの自治）』という著作にもみられます。この作品は、彼が南アフリカで発行していた新聞に連載され、まもなく書物としても出版されました。まずグジャラーティー語で執筆・出版されますが、すぐにガーンディー自身によって英語に訳され、広く知られるようになります。「自治」とは何かについてのガーンディーの考えを記したもので、その内容は編集者と読者との対話形式で記されています。たとえば読者が、インド解放のためにどのような方法を考えているか、と尋ねると、編集者がそれに答える、それに対してまた読者が疑問を投げかける、といったかたちです。ガーンディーの考えは編集者の言葉に反映されています。その両者の言葉のやりとりのなかで、ガーンディーの考える自治とは何か、そのための手段とはどのようなものなのかが、次第に明確になっていきます。

彼自身が序文のなかで触れているのですが、ここに書かれている対話のなかには、実際に彼が人々と交わした対話がもとになっている場合もありました。彼はこの著作の読者に対しても、彼らの意見を寄せてくれるように要望しており、自分の見解が誤っていれば固執しない、とも述べています。ガーンディーは自らが「真理」であると確信したことについては、かなり頑強にこだわるのですが、その一方で様々な人々、考え方、言葉との対話をしつづけ、その対話の過程自体をも人々に示しつづけた人物である、といえるように思います。その様子は、残された膨大な書簡や、彼の発行する新聞における読者とのやりとりなどに顕著に現れています。

ガーンディーの話し方自体も、こうした彼の姿勢を反映したものであったようです。生前の彼を知る人の言葉によれば、ガーンディーの話声は低く歌うようで、大勢の人々に向かって話しているときでも口調は会話調であったとのことです。現在、音声で残っている彼のスピーチを聞いていても同じような印象を受けます。

対話を重視するということにも関係しますが、彼は簡明な内容を簡明な言葉で伝えることを大切にしていました。民衆にわかる言葉、表現を用いるようにと、エリートたちにも繰り返し訴えています。

ただし、多言語社会のインドでは、異なる言語集団に属する人々の間で話をする際にはどの言葉を用いればよいのか、という問題がありました。そのために、インドのエリートたちはしばしば英語を用いていたわけですが、ガーンディーは、英語は民衆とエリートとを分断するものであると考えていました。彼は、各自がそれぞれの母語で教育を受けることを説くとともに、インドの共通語としては、北インドで広く話されているヒンディー語、彼の言葉でいうところの「ヒンドゥスターニー語」を用いることを主張しました。

ここで、ガーンディーがなぜ「ヒンディー語」ではなく「ヒンドゥスターニー語」という表現を用いたのか、という点が気になる方もいるかもしれません。実はガーンディー自身も、ある時期まではインドの共通語となるべき言葉を「ヒンディー語」と呼んでいました。ところが当時の北インドにおいては、「ヒンディー語」というと、これをデーヴァナーガリー文字で表記され、サンスクリット語起源の語彙を多く含んだ言語として捉えるヒンドゥー知識人たちも少なくありませんでした。しかしガーンディーは、北インドで人々が広く用いている言語を共通語とする際には、表記するための文字はデーヴァナーガリー文字とペルシア文字のどちらでもよいと主張し、また、難解なサンスクリット語の語彙は使うべきではないとも訴えていました。その背景には、ほぼ同じ言語をペルシア文字で記し、「ウルドゥー語」と呼んでいる人々——とりわけムスリムの人々——の存在がありました。ガーンディーが目指していたのは、宗教コミュニティ、地域、階層を超えて、広範な人々が共有できるような言葉でしたので、そのためには両方の文字を認めるべきであり、多くの人々にとってなじみのない語彙は避けるべきである、と彼は考えたわけです。こうした自らの立場を明示するために、彼は「ヒンディー語」ではなく「ヒンドゥスターニー語」という表現を使うようになります。

ガーンディーの言葉をめぐる模索はたいへん興味深く、このほかにもお話ししたいことがいろいろとあります。もうひとつだけ強調したい点をあげるならば、彼はとりわけ重要な意味をもつ概念・考えを伝える際には、言葉、表現について深く吟味し、ときには修正を加えながら、繰り返し説明している、ということです（たとえば「サティヤーグラハ」という言葉についての説明など）。ガーンディーは言葉に対して十分な注意を払っていた、といえるかと思います。これに関連して、彼の「翻訳」に対する考え方もたいへんおもしろいのですが、時間の制約から、この話はいずれ別の機会に、ということにしたいと思います。

(4)「語り」を伝える人々

最後に、ガーンディーの語りを検討する際に、私がさらに注目したいと考えているのが、ガーンディーの語りを伝えていた人々の役割です。「語る人」ガーンディーの周囲には、常にその語りを記録し、印刷物や口伝えでそれを広めていった人たちがいました。また、それぞれの地域でこうしたメッセージを受け取り、それを在地社会・コミュニティに伝えていく多数の人々が存在しました。

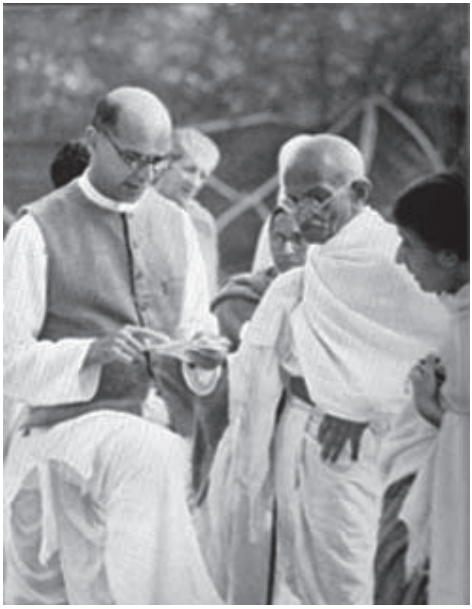

図4　ガーンディーと彼の秘書マハーデーヴ・デーサーイー（1939年）
出典：Wikimedia Commons（Mohandas K. Gandhi）

たとえばここにあげた写真で、ガーンディーの隣りに写っているマハーデーヴ・デーサーイーは、ガーンディーの秘書のなかでもとりわけ重要な人物で、長年にわたって彼と生活を共にし、彼の言葉や活動を記録しつづけました。デーサーイーはガーンディーの言葉を書きとり、ガーンディーの発行する新聞の記事の執筆や編集に携わり、ガーンディーのグジャラーティー語の著作を英語に翻訳したりもしています。デーサーイーをはじめとして、ガーンディーの周囲には、生活を共にし、家族のような関係を築きながら、彼の「語り」を記録し、その発信を助ける人々が常にいました。そうした人々の存在があったからこそ、ガーンディーの「語り」は大きな発信力をもつことができたと考えられます。

さらに、ガーンディーのすぐ身近にいる人々に加えて、インド各地で彼の言葉

を新聞、書簡などを通じて受け取り、それをさらに在地社会・コミュニティに広く伝えていた多数の人々が存在していました。その過程では、ガーンディーの語りは、それぞれの地域の社会・コミュニティの状況にあわせて、多様な言語・表現・形態によって、しばしば独自の解釈が加えられたかたちで、伝えられていくことになります。印刷物、口伝え、噂、歌やパフォーマンス、実践を伴ってのメッセージ発信など、様々な伝え方があったわけです。植民地期インドにおける「語る人」ガーンディーを考える際には、ガーンディーが「語る人」たるのを支えた人々、ガーンディーの「語り」を媒介した人々の存在にも注目しなければならない、と感じています。

最後の写真は、ガーンディーが演説する場面を写したものです。語りかけるように話す彼のスピーチは、周囲の者たちによって記録され、印刷され、伝えられていきました。あるいは口伝えで、ときには解釈され、変容を経ながら、伝えられていきます。また、さきほどの話に戻りますが、彼がここで語る言葉は、その内容もさることながら、ここに集まった聴衆にとっては、彼の姿、彼の身体とあわさることで、さらに大きな意味をもっていたように思われます。

図5　ガーンディーの祈りの会（1946年）
出典：Wikimedia Commons（Mohandas K. Gandhi）

まとまりのない話になってしまいましたが、「語る人」としてのガーンディーを4つの観点からお話ししてみました。いわずもがなですが、ガーンディーの行動はもちろん「語る」という側面だけで論じられるものではありません。ただ今回、こうして他の地域における「語る」人々の事例と並べて、「語る」という側

面からガーンディーを考えてみたとき、ガーンディーの語りのもつ力、当時のインド社会の状況について、比較を通じて浮かびあがってくる部分もあったように感じています。今後、企画研究の他のメンバーの方々のお話をうかがいながら、どのようなことがさらに見えてくるだろう、と楽しみにしているところです。

ご清聴、どうもありがとうございました。

＜今回の報告に関連する文献＞

＊ガーンディー関連文献は、英文はもとより邦文でも多数あります（翻訳も含め）。以下はあくまで今回の報告との関連が深い文献、ということでご理解ください。

The Collected Works of Mahatma Gandhi. New Delhi: The Publications Division, Government of India, 1958-94.

Gandhi, M.K.（ed. Suresh Sharma and Tridip Suhrud）. *M.K. Gandhi's Hind Swaraj: A Critical Edition*. New Delhi: Orient Blackswan, 2010.

Gandhi, M.K.（tr. Mahadev Desai, ed. Tridip Suhrud）. *An Autobiography or The Story of My Experiments with Truth: A Critical Edition*. New Haven: Yale University Press, 2018.

Guha, Ramachandra. *Gandhi before India*. New Delhi: Penguin, 2013.

Guha, Ramachandra. *Gandhi: The Years that Changed the World, 1914-1948*. Gurgaon: Penguin. 2018.

Hardiman, David. *Gandhi in His Time and Ours*. Delhi: Permanent Black, 2003.

Mehta, Ved. *Mahatma Gandhi and His Apostles*. Harmondsworth: Penguin, 1977.

Slate, Nico. *Gandhi's Search for the Perfect Diet: Eating with the World in Mind*. Seattle: University of Washington Press, 2019.

Suhrud, Tridip. *Reading Gandhi in Two Tongues and Other Essays*. Simla: Indian Institute of Advanced Study, 2012.

Tarlo, Emma. *Clothing Matters: Dress and Identity in India*. New Delhi: Penguin, 1996.

井坂理穂「M.K.ガーンディーとグジャラートの言語・文学」『アジア・アフリカ地域文化研究』第 8-2 号、2009 年、177-94 頁。

井坂理穂「何を食べるか、食べないか――M・K・ガーンディーの模索」東京大学教養学部編『知のフィールドガイド　分断された時代を生きる』白水社、2017 年。

井坂理穂「グジャラーティー語文学概観――近現代を中心に――」粟屋利江・太田信宏・水野善文編『言語別南アジア文学ガイドブック』東京外国語大学南アジア研究センター、2021 年、301-317 頁。
（http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/100314/1/South+Asian+Literature+Guidebook.pdf）

石井一也『身の丈の経済論　ガーンディー思想とその系譜』法政大学出版局、2014 年。

M.K. ガーンディー（田中敏雄訳）『真の独立への道（ヒンド・スワラージ）』岩波文庫、2001 年。

M・K・ガーンディー（田中敏雄訳注）『ガーンディー自叙伝 1・2　真理へと近づくさまざまな実験』平凡社東洋文庫、2000 年。

中島岳志『ガンディーからの＜問い＞　君は「欲望」を捨てられるか』NHK 出版、2009 年。

間永次郎『ガーンディーの性とナショナリズム　「真理の実験」としての独立運動』東京大学出版会、2019 年。